

仙台司教区

教区事務所だより

教皇訪日一周年

生活に活かそう 教皇のねがい

― 重点は家庭・平和 ―



(第 53 号)
昭和57年3月1日

年が明けてもう二月。多難な問題をかかえながら一九八二年も過ぎてゆくのは早い。二月といえど日本のカトリック信者にとつて忘れられない月となった。昨年二月二十三日から四日間、教皇ヨハネ・パウロ二世が親しく日本を訪問されたからである。国中を沸き立たせた教皇の訪日は、つい先日のことのようにもあり、また遠い昔のことにも思える。昨年のいまごろはなにか落ち着かない気持ちで教皇の来日を待っていた。教皇は日本での四日間、すべての行事で私たちの予想をはるかに越えたすばらしさを示してくれた。堂々たる日本語でのメッセージは、いまま私たちの耳に残り、心から消えない。私たちは最高の牧者である教皇との結びつきをあらためて感じ、教会が一体である喜びを知った。日本の教会も、そして信者の一人ひとりも、口ではいえないほどの慰めを与えられたのである。

* 訪日メッセージを読み返す

思いがけない教皇訪日の感激は、もつと深い信仰へと私たちを決心させた。日本での二十におよぶ教皇メッセージは、私たちの信仰生活の具体的指針である。全教会や各教区での今後の対応が期待されるが、教皇のねがいは私たち信者の一人ひとりが確実に実行することにはかならない。教皇の訪日一周年を迎えたいま、もう一度教皇メッセージを読み返すことから始めよう。(「訪日公式メッセージ」中央出版社・五八〇円) 次のことなどは実践のヒントになるかも知れない。

「家庭教会」と名づけた家庭内での信仰生活をとのえることは、教会刷新の強力なカギである。ミサ聖祭を平和の源と理解することは、信仰を生き生きしたものにする。広島で教皇が叫ばれた平和アピールは、そのまま私たちの平和に対する考えとならねばならぬ

い。教皇が賛嘆してやまなかつたキリシタンの信仰の強さは、私たちに励まし奮い立たせるものである。そのほかにすばらしい数々の教えを私たちに示して下さっている。

* 四旬節はじまる

さて二月二十四日から今年の四旬節。私たちに救いをもたらしたキリストのご受難と死を黙想して、自分の信仰を反省するときである。また、キリストの愛を実践するときでもある。教皇は今年の四旬節愛の実践運動のために、「四旬節は私たちのうちにまだ残っている利己心や、助けを受ける権利をもつ人さえも遠ざけようとする過度の物質主義や執着心を取り除き、きよめるために与えられている」と説き、愛と分かち合いの精神から、四旬節の祈りと献金を通し、善きサマリヤ人であるキリストに倣い、私たちの隣人に手をさしのべることを訴えている。信仰をあかしし、信仰に生きる絶好のときである。

司教の日程

(2月5日現在)

- 3月1日 教区司祭団役員会(仙台)
- 4日 渡辺吉徳師一周忌ミサ(渋谷教会)
- 8日 仙台司教区司祭評議会(仙台)
- 9日 中央協議会建物検討委員会(東京)
- 10日 社会福祉法人理事会(仙台)
- 11日 桜の聖母短大卒業式(福島)
- 18日 19日 神学校常任委員会(東京)
- 20日 白百合短大卒業式(仙台)
- 21日 仙台司教区司牧評議会(仙台)
- 28日 聖ウルスラ修道会誓願式(仙台)



仙台教区・カテキスタ会

研修会・総会

― 仙台で ―



去る1月11日から13日までの三日間、仙台市勾当台会館で、仙台教区カテキスタ会の研修会・総会が行われた。会合には佐藤千敬司教も出席。仙台教区で働くカテキスタ16人、司祭6人が参加。講師として招いた東京・田無教会カテキスタの伊藤慶枝さんの話をきいた。伊藤さんは、「聖書を入々に伝えようとする者は、まず自分自身でもそのための工夫をし、努力しなければならぬ」という意味の事を語り、みことばを人々に伝えていくために、みことばがどれほど自分自身のものにならなければならないかを痛感させられた。

びつりつまつた日程の中で、同じカテキスタとして働いている者同士が、休憩時間や食後の時間までも利用して教会での仕事の事に熱中、また司教、司祭、カテキスタが文字通り、寝食を共にして研修会を盛り上げた。

仙台教区には現在二十人のカテキスタが働いており、仙台教区カテキスタ会を結成、二年に一度、全員での研修会・総会を開いている。なお、総会の最終日に役員の変更があったが全員再選され、次の通りである。

- 会長 阿部 輝雄(一の関)
- 副会長 横尾 重信(湯 本)
- 書記・会計 加美山 恵子(花巻)
- 監事 新松 義男(本町)

ポーランド危機に関心を

― キリスト者と市民が集会 ―

△ 盛岡 V

ポーランドの自主管理労働組合「連帯」への支援を呼びかけるため、盛岡のカトリック関係者が中心となり、岩手カトリック・センターにおいて、1月27日午後7時から、「弾圧下の『連帯』とポーランド市民を支援する集会」を開いた。市民主導の集会としては県内で初めて。集いに先立って午後6時半から、ポーランド人の二本松教会のパウロ神父と盛岡市内のベトレム会の五人の神父が共同ミサを捧げ、「連帯」に神の恵みを祈った。

午後7時から始まった集会には、教員、学生、主婦、勤め帰りの会社員等約百人が参加。ポーランド・ドミニコ会の宣教師パウロ・ヤノシンスキー神父を囲んで同国の現状や、市民への支援の方法など熱心に聴いた。

パウロ神父は、「5年前から日本に居り、ポーランドの現状は、両親、友人からの手紙、テレビで知るよりない。スト・戒厳令下で、食料品不足に陥って、老人らが六時間も列をつくって買い求めるという。最近では、歯みがきや石けん等の日用品まで事欠くとの連絡も入っており、このような事態が一日も早く解消されるよう願う」と訴えた。

この後、在日ソ連大使館に対して、「ポーランドへのあらゆる介入、干渉をやめるよう望む」と、また在日ポーランド大使館には、「戒厳令の解除、逮捕者の釈放」を参加者一同で

要請することを決めた。

この実行委員会(委員長アントニオ・ツィゲル神父)は今後も随時集まりを開くことにしているが、集会と並行して市内の教会などに募金箱を置いて、カンパ活動を行い、中央のポーランド人をたすける会(代表・工藤久代・東京都調布市入間町)に送ることにしている。なお、この市民集会は、岩手日報、朝日新聞岩手版にも大きく報道され、人々の関心を呼びおこした。

ポーランドの神学生を助けよう



― 松木町教会で募金活動 ―

仙台教区で働いているポーランド出身の神父さまをご存知ですか。

ポーランドの緊迫した状況は日々のニュースで知らされ、各地で援助活動が始まった。ポーランド人ということで話をたのまれる事が多い現在福島市松木町教会助任で二本松教会主任司祭を兼ねている弱冠三十歳のドミニコ会員ヤロンワフ・タデウス・ヤノシンスキー(通称パウロ)神父がその人。

パウロ神父は物資不足に悩む故国ポーランドのドミニコ会修練院、神学校等を援助するため募金活動を始めた。すでに松木町、野田町両教会や、福島市のプロテスタント各教会が協力しているが、他の教会にも協力を呼びかけている。ご賛同の方は左記宛義援金をお送り下さい。

960 福島市松木町四―二

松木町カトリック教会 パウロ神父

さよなら

金ヶ崎聖母幼稚園

ハ水沢 V



水沢教会付属のカトリック幼稚園として、三十年間地域の幼児教育に尽くし、福音宣教の場でもあつた金ヶ崎聖母幼稚園(園長・ローネル神父)は四月一日の新学期から金ヶ崎町に譲渡されることになった。

この話は五年ほど前に、金ヶ崎町の教育委員会が町に公立幼稚園を、ということで譲渡を依頼してきていたもの。

設置者である佐藤千敬司教をはじめ、ベトナム外国宣教会の岩手地区委員会、水沢教会、金ヶ崎幼稚園等が相談した結果、金ヶ崎町の依頼どおりに聖母幼稚園を町に譲渡することになった。

この三月で金ヶ崎聖母幼稚園は、三十年間にわたる教会付属幼稚園としての歴史を閉じるわけで、水沢教会にとつても、園児、卒園児や、父兄にとつても寂しさはひとしお。

なお、現在の職員は、引き続き勤務し、在園児も、そのまま町立幼稚園の園児として通園を続ける。

「主こそわがやどり」

一盛岡でキリスト教一致祈禱集会

盛岡キリスト教連合による恒例のキリスト教一致のための祈りの会が、1月19日と21日の二日間、盛岡・志家教会とバプテスト連盟

の天神町教会で行われた。

一日目は、日本風建築で親しまれているカトリック志家教会で、ヨゼフ・シュミドリンス超教派のテープで演奏された音楽を聞きながら、心を合わせ共同の祈りを捧げた。説教に立った中条和哉牧師(内丸キリスト教会)は預言者イザヤの言葉を取り上げ、「武器を農具に変え、戦いの道具を平和の道具に持ち変えて平和への道を歩もう」と呼びかけ、今や、キリスト者の実際的な働きが期待されていると訴えた。

二日目は、バプテスト教会で、同教会の城前和徳牧師の司式と説教で厳肅な雰囲気の中で行われた。説教では、キリスト者の一致をテーマに、相互の違いを見るのではなく、同じ神をあがめ、一つの聖書により、一つの聖霊に力づけられ、相互に共通するものをまず前面に出して、具体的な活動を通して歩み寄り、一致していくことが大切、と話された。両日とも約三十人が出席、祈りの会の後、茶話会でなごやかな交流が行われた。

健康な赤ちゃんに
恵まれるために



一岩田帯の祝福をするシュミドリンス神父

今年、赤ちゃん出産予定のお母様方への耳よりな話

盛岡志家教会のシュミドリンス神父は、日本の文化、生活習慣を信仰生活の中に無理なく取り入れようと目下研究中

その一つとして、同神父は、「祝福の祈り」というパンフレットを作り、家、自動車等、

普通神社で祈禱してもらおうような事柄をカトリックの祈りに取り入れ、祝福の祈りを一つ一つ作り、信者に頼まれる時、祝福の式をしている。その中には、岩田帯の祝福の祈りもあつて、出産をひかえた母親は健康のうちに元気な赤ちゃんに恵まれるよう、次にかかげた祝福の祈りで、岩田帯を祝福してもらおう。

「神様御自身、夜の空に帯の様に銀河(天の川)を置かれました。旧約聖書にも新約聖書にも帯の事が大変多く書かれています。

聖書には、帯というものは、用意、忠実、強さ、力、剛毅、のシンボルであります。

こういう意味でこの腹帯を祝福いたします。神よ、あなたの慈しみによって、すべてのものが祝福されます。この腹帯の上にあなただの祝福をそいで下さい。

この帯を用いるお母さんに、お産のための用意、強さ、力、剛毅、体の健康と精神の安定をお与え下さい。

胎内の子供が成長し、無事にこの世の光を見る事ができますように。私達の主イエズスキリストによつて。アーメン

黙想会のおしらせ

日時 3月14日(日)午後3時17日(水)正午まで
場所 東仙台・元司祭館
指導 モニック・ブッシュ修道女
対象 中学三年生から高校三年生
主催 元寺小路教会高校生会・責任首藤神父



「神さま、おはようございます。神さま、さようなら」と、祭壇に深々とおじぎをするママちゃん。ママちゃんは、毎週お母さんと一緒にミサに来る三歳のかわいい女の子。

ママちゃんの元気なあいさつを聞いて、神さまはどんな気持ちだろうか。

そんなことを思いながら、私はふと、自身のことをふり返る。

教会にいと、様々な電話が入る。仲間の神父からは、「ちよつと思ひ出したから電話してみたのだが、元気かい」と。また、いろいろな人が訪ねてくる。かつて共に聖書を読んだ人は、「近くまで来ましたので寄つてみました」と。

うれしくなる。特に、心にかかつている人が元気を顔を見せてくれた時などは、最高である。

ただ顔を見せてくれるだけで、ひと声かけて、たとえすぐに帰つたとしても、そのひと声がいれしいものである。

私ですらそうなんだから、神さまならどうなんだろうか。私たち一人ひとりのことを特に心にかけ、そのひとり子を与えられるほどに私たちを愛された父なる神さまは……

今は四旬節。聖堂の聖櫃のうちにおられるイエズスさまに、私たちの顔をお見せし、ひと声をかけてみてはいかがが……。

(狼河原)

カトリック系新聞・雑誌紹介

金額は年間購読料

- ◎ カトリック新聞(カトリック新聞社)週刊・5000円
日本カトリック教会の機関紙で国内外のニュース等掲載。
- ◎ カトリック生活(ドン・ボスコ社)月刊・2400円
聖書・典礼解説等、写真を豊富に使つて万人向き。
- ◎ 家庭の友(中央出版社)月刊・3000円
家庭の種々の問題を取り上げ良き家庭を目ざす。
- ◎ あけぼの(女子パウロ会)月刊・2400円
女性向きのエッセイ・対談等掲載、人生を考える書。
- ◎ 聖母の騎士(聖母の騎士社)月刊・1200円
聖母にならない、素朴な信仰を育てる小冊子。
- ◎ 声(声社)月刊・2600円
現代の問題を取り上げながら信仰の眼で洞察。
- ◎ 世紀(上智大世紀編集室)月刊・3600円
毎月特集を持ち、信仰生活を高める香り高い論文が多い。
- ◎ 布教(オリエンズ宗教研究所)年11回発行・6000円
年間テーマに基づいて専門家と現場からのレポート。今年のテーマは「信仰を育てる」、主日の説教も掲載。
- ◎ 教えの手帖(教えの手帖編集部)月刊・2600円
教会学校リーダーと子供を持つ父母のための雑誌。
- ◎ こじか(オリエンズ宗教研究所)週刊・2000円
小学生のための信仰教育の週刊誌。82年度は主日の福音の解説と聖人物語の予定。マンガ、クイズも有り。
- ◎ こどものせかい(至光社)月刊・2500円
幼児の心を育てる夢のある絵本。父兄向きの頁も有り。



ものみな新たになる春、新学期にそなえ、カトリック系新聞・雑誌・書籍等を購読し、信仰生活をより豊かなものにしたいたいです。

◎ 教皇と日本の若者 ヤング&ボーブ 女子パウロ会発行 定価七百五十円

一年前日本武道館で繰り広げられた教皇と若者との対話集の感激は今も忘れられない。あの感激を再現し教皇の期待に答えるため、今、私は何をしているかを考えたい。

◎ マザー・テレサ 訪日講演集 女子パウロ会発行 定価六百元

初めての訪日、短い滞在にもかかわらず、日本中の人々は彼女の生きざまと、そこからあふれ出る生きたことばに圧倒された。もう一度味わいたい珠玉編の数々……。

◎ キリスト教会の歴史 女子パウロ会発行 全十巻 各巻五千五百円

初代教会から中世、近世、そして現代に至るまでのキリスト教会の歴史を大きなカラーのさし絵入りで全十巻に集録。キリスト教研究のために、特に中・高校生に最適。子どもから大人まで楽しく学べる全集である。

八戸市の白菊学園高等学校(ノエラ・ゴド
ロ校長)には、テレビア会という奉仕グルー
プがある。56年度は部員28人を出発。種々の
体験学習を通してボランティア活動の意義を
学び、ボランティアを行なっている。

● 障害者と私達 中島尚子(高二)

車イスにすわって 僕は 僕は考えた
車イスにすわって デイトはできるだ
ろうか

このごろ そんなことを考えてしま
う 笑われそうなのがするんです
僕だけ僕だけ 他の世界にいるみたい
みんな同じ空の下
生きてる 生きてる

この詩は、奈良県の重度脳性マヒの青
年が自分の足で書いた、不自由な人達み
んなの願い「みんな同じ空の下」です。
障害者と私達健常者との間には、果た
してどれだけ差があるのでしょうか。

私は昨年8月、日本青年奉仕協会主催
の十代ボランティア創造活動文化祭全国
大会に白菊学園から参加しました。この
大会での最大の収穫は、大会二日目のフ
ールドワーク「ハンディキャップゲーム
を考える」に参加した事です。

みなさんは障害者と健常者が一緒にゲーム
ができると信じますか。それが、ごく自然に
できるのです。車イスの人が鬼になりました。
私達のグループリーダーは弱視の人でした。
最初は何一つルールをききません。ゲームを

ボランティア活動を考える



白菊学園高等学校

してみても問題を見つけます。その問題を一
つ一つ解決して、また同じゲームをします。
全盲の人は見えないのでボールを使うゲーム
の時は鈴をつけます。健常者にハンディをつ
けるのも大切なルールです。目隠しする、片
足になる。でもゲームですから障害者だけが
有利になってもいいけません。多少の苦勞
があつてこそ本当のゲームになります。

障害者の人達は、特別視されるのを、と
ても嫌います。

自己紹介の時23歳の脳性マヒのお兄さ
んが恥ずかしそうに「無職」と言つたの
を覚えています。

障害者の人達が心から願っているのは、
みんな同じ空の下、生きてたいのです。働
きたいのです。共に生活し、学びたいの
です。

同じ空の下で、同じ人間として！

● 第五回インターアクトの翼

「台湾研修旅行」に参加して

私達白菊インターアクトクラブは、国
際ロータリー第二五四四区の協力で、
1月5日から11日まで中華民国台湾に研
修旅行を実施。

I A C Oの二つの目標「奉仕」と「国際理解」
の内の一つ、「国際理解」を深めるという目的
で私達はこの旅行を計画した。目的地は台湾
省の台南市と高雄市である。

台南市で私達はロータリアンの家に分宿し
民泊を通して台湾の人達の生活と人となりを

知ることになった。古い都、台南の史跡見学、
国民中学校の生徒との交歓会、毎日、イン
アクトで収穫の手伝いをするなど、自然の
中で充実した毎日をお過ごした。中でも台湾の
田舎の結婚式に出席する機会があつたのは、
私達にとって思いがけない喜びであつた。家
畜小屋と民家の密集する狭い路地にテントを
張り、そこが宴席である。突然の私達の訪問
に一族は大喜び、私達も宴の人となつた。は
なばなしい爆竹の音、次から次へと運ばれる
料理の山、はえの歓待、ことばは通じなく
ても、人なつっこい彼らの優しい目とほほえ
みは、私達の心を暖かく包んでくれた。

もう一つの印象深い思い出は、台湾のウル
スラ会経営の姉妹校高尾市の文藻外国語学校
である。古風な中国式な建物と、ミッション
スクールらしい清麗な環境はとても美しく、
学生達は私達を大歓迎してくれ、ことば以上
のもので通じ合うことができたと思う。学生
達は、この学校で英語は全員、完全にマスタ
ーする他に、仏、独、スペイン語のいずれか
一つも学ばなければならぬ。学生の勉学に
対する熱意は相当なもので、語学力に乏しい
私達にとり、大いに励ましとなった。

この旅行を通して、私達は、日本の外に出
て初めて外国を肌で知る機会となり、また、
改めて日本を知るチャンスともなった。そし
て、人と人との触れ合いは、ことば以上のも
のがあり、この体験は、奉仕活動をする上に
大いに考えさせられるものがあつた事を付け
加えたい。



白石教会は、東北本線白石駅の西、徒歩10分のところに位置し、蔵王を背に、沢端川の清流のほとりに建てられています。

創立は昭和25年。教会建設に際しては、近隣の大河原教会主任のダビオ神父の協力があり、当時仙台に進駐していた米軍将兵や、ダビオ神父の国(カナダ)の信徒達に呼びかけて集めた浄財によるところが多かったです。

昭和25年12月8日教会建築は終わり、浦川司教による司式で献堂式が行われ、同司教の霊名に因んで、大天使聖ミカエルに奉獻された教会として祝別されました。

しかし、白石の地には教会が建設される14年も前、昭和12年頃からすでにカトリックの信仰の種が播かれていたのです。当時の大河原教会主任のラローズ神父が白石を巡回し、市内の旧家関さん宅(教会建設に理解のあった歯科医)でミサを捧げ、子供達には要理指導を、青少年には聖書研究グループを作り、集会時には常時20人位の参加者があったと聞かれています。

しかし当時は日中戦争がたけなわの暗い時代で、宣教師の方々のご苦労は並大抵の事ではなかったようです。関さん宅の周囲には特高の刑事がうろつき、ラローズ神父にスパイの嫌疑がかかったこともあったとか。昭和16年12月8日、第二次世界大戦が始まり、ラローズ神父は仙台、続いて浦和に抑留され、昭和20年の敗戦まで抑留生活を余儀なくされました。

白石教会初代の主任司祭は、深沢守三神父です。昭和25年から36年までの11年間、司祭館建設、庭の整備、そして多数の信徒が誕生するなど、活気ある白石教会の基礎を築きました。特に桜と庭木で調和のとれた美しい庭の中央にはルルドの聖母が立ち、その周囲を春には芝桜が咲きほこり、桜の花と相俟って庭全体をひきたてています。

また告解室の上部には、ルカ福音書の「放蕩息子」のたとえ話を描いた壁画があり、これも芸術家の深沢神父が残されたものです。

深沢神父の後任として、黒滝龍彦神父が短期間在任、その後平塚秀雄神父に代わりました。平塚神父は健康を害しており静養を兼ねての司牧でしたが、薬石の効なく病状が悪化、昭和43年10月1日多くの人達に惜しまれながらその靈魂を天に帰したのです。昭和44年から6年間梅津雅史神父が主任の任に当たり、その後、白石教会はしばらく司祭不在の教会となりました。度重なる巡回教会の憂き目にもめげず、先人の播いた種は、消えることなく、細々と数少ない信徒によって受け継がれていきました。

昭和51年5月、ケベック外国宣教会から常任司祭としてペランジェ神父とラボンテ神父を迎えました。両神父は、市内商店や工場で働きながら司牧と布教に当たっていました。2年後にラボンテ神父はカナダに帰国、55年4月にはペランジェ神父が川崎へ赴任、その後を受け継いだのが現在の首藤正義神父です。

白石教会は、現在信徒の数こそ50人そこそこですが、信仰で結ばれた共同体として主任司祭を中心に、家族同様の付き合いをしています。ミサ後、司祭館に集まり話し込み、時間を忘れることもたびたび。婦人会の月二回の生花教室の後のお茶のみ話もまた楽しいひとときです。秋には芋煮会が開かれ、更に親睦を深めています。

このような雰囲気は他の土地に移って行く人達にとつては、心のふるさとなのでしょう。帰省の際は、必ず教会を訪れてくれます。

最近若者が多く教会に来るようになり、昭和30年代の活気を取り戻しつつある白石教会といえるでしょう。(渡辺亮二記)

【編集後記】

◎教区だよりを盲人のために
 テープにふき込んである人が
 いる◎公立からカトリック校に転校する子供が
 多くなつた◎一見無関係に見えることどもが
 教会の新たな息吹きを感じさせられる此頃。

仙台司教区事務所だより

昭和57年3月1日発行

発行所 仙台司教区事務所

980仙台市本町一丁目2番12号

TEL 0222 22 7371